

3. 市木川の水の涸れる話

市木を流れる一筋の川があります、市木川とも河崎川ともよんでいきます。この川の源は、木場大谷などという山から、遠くあちらこちらと巡って、川下は河崎川といって錦江湾に注いでいて、長さは約一里余りあります。

この川は、毎年秋の八月中旬の頃になると、永吉というあたりから水が絶えて少しも残らないで水無川となって、川下の桑鶴という処あたりでまた水が湧き出して、河崎川の流れとなります。

このようにして、冬十二月の末迄は変わることがなく、明けて正月の末頃、或いは二月になってまた、元のように上流から、ずっと水が流れて川となります。

昔、弘法大師が来られて、ちょうど八月の半ば頃で、或、身分の低い女が青菜と芋を川で洗っていましたが、大師はこれを見て、自分にも少し分けてくれと乞われました。ところが、女は惜しいと思ったのか一つも分けてやりませんでした。そこで大師は大そう不機嫌になられ、持っていた杖で川水を打たれて立ち去られました。それから後、その水は涸れてしまい、今に至るまで、毎年八月青菜を洗う頃になると、水が涸れて、冬の終わりまで川底を潜り桑鶴の所で水が湧き出して川の流れとなります。

どうしてこのような現象が起こるのでしょう。弘法大師は名高い聖徳の人であって、いつも流れている川の水を俄につき果たすことをすると、万物について、その辺の人々は便利は悪くなって心配事も多くなるでしょう。自分で乞うた物をくれないからといって、それをけしからぬことと怒って、川の水が尽きるように祈り給うことはあり得ないことと思われます。大よそ、水は春の半ば頃からだんだん流れが増してきて、秋の半ばから涸れて行くものであると聞いています。

礼記という唐の本に、仲春の月始めて雨水すといい、仲秋の水始めて涸れると記されています。仲秋八月の頃になると、水の勢いは下って来て、水の道は低くなって、処によっては、地の底を潜って、上には少しも流れないものであると聞いています。

この市木の川も、秋毎に水の涸れるに従い、永吉のあたりの前から川底に水道が下がって、川下の桑鶴に至って僅かに流れ出るのでありましよう。それで八月から翌年春の初めまではそのままで、二月頃からやや元のように流れ出るのは、前の礼記の話にも合っています。